

「邪馬台国はどこにあったのか」 考古学界で優位の近畿説に反論 九州説の「逆襲」相次ぐ理由は

上村里花 | 社会 | カルチャー | 速報 | 奈良 | 福岡 | 佐賀 | アート・書

毎日新聞 | 2020/7/21 10:20(最終更新 8/4 16:26) | 有料記事 | 2546文字



纏向遺跡の大型建物跡(手前)。奥は箸墓古墳=奈良県桜井市で2018年5月14日午前11時13分、本社へりから三村政司撮影

中国の歴史書「魏志倭人伝(ぎしわじん でん)」に登場する邪馬台国は、女王卑弥呼(ひみこ)の存在とともに多くの歴史ファンを魅了してきた。しかし、「邪馬台国はどこにあったのか」という最大の謎については、江戸時代以来、論争が続く。大きくは九州説と近畿(畿内)説の二つに分かれる中、近年になって相次いでいるのが九州説を唱える書籍の出版だ。考古学界では近畿説が圧倒的優位に立つ中、なぜ九州説の「逆襲」ともいえる状況が生まれているのか。【西部学芸グループ・上村里花】

「『九州説ですか』と聞かれた時は『7割は九州説、3割が近畿説』と答えている」。昨年12月に「続・邪馬台国論争の新視点」(雄山閣)を出版した福岡県小郡市埋蔵文化財調査センター所長の片岡宏二さん(考古学)は、邪馬台国の所在地についてそう語る。では、その「3割」とは何か。片岡さんが挙げるのが、奈良県桜井市の纏向(まきむく)遺跡を中心とし

た遺跡、遺物の多さだ。

そもそも纏向遺跡が邪馬台国の最有力候補に躍り出たのは、卑弥呼が活躍したとされる3世紀前半の

大型建物跡が2009年に見つかったのがきっかけだ。同時代の建物跡としては国内では最大級で、佐賀県の吉野ケ里遺跡で最も大きな「主祭殿」の約1.5倍となる。3棟の大型建物群が東西に一直線に並ぶ計画的な配置に「これこそ卑弥呼の宮殿」とヒートアップ。18年には建物群の近くで出土したモモの種が、放射性炭素(C14)年代測定で、卑弥呼の活動時期(190年ごろ女王となり、248年ごろ没)に一部重なる分析結果(135~230年)が出たことから「近畿説で決まり」といった論調まで飛び出した。

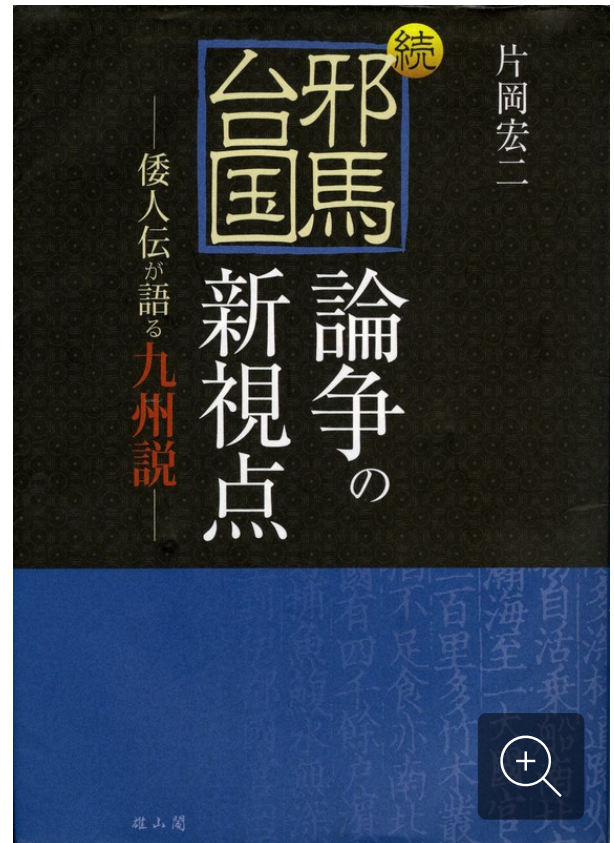
その後も、祭祀(さいし)に使ったとみられる多量のモモの種や、各地から献上されたらしい多数の動物や魚の骨など、同遺跡の勢力範囲の広大さを示す遺物が確認されてきた。

一方、片岡さんはこの「纏向遺跡の立派さ」こそが、逆に「邪馬台国らしくない」と指摘する。

倭人伝によれば、2世紀ごろ、倭国が乱れ、戦乱が続いた。そこで、クニグニが一人の女子を王に立てた。それが卑弥呼であり「卑弥呼が都する」所が、約30のクニで構成される連合国の一つ、邪馬台国となる。片岡さんは「纏向遺跡には次のヤマト政権につながっていく強力な権力の集中が見られる。一方、九州には突出した遺跡はなく、小さなクニグニが連立していたさまが見てとれる。これは『魏志倭人伝』に書かれたクニグニが連立する倭国の状況により近い」と主張する。

片岡さんは、卑弥呼の性格や死後の状況からも九州説を取る。

倭人伝で晩年の卑弥呼は、1000人の侍女をはべらせ、常に警護がつくなど、強大な力を持った姿で描かれる。しかし、それは半世紀近くの治世の間に生まれた権力で、当初はクニグニに「共立」された弱い存在に過ぎなかった。さらに卑弥呼の死後、倭国は再び戦乱に陥り、卑弥呼の親族の女性である台与(とよ)を共立することになる。



片岡さんの新著「続・邪馬台国論争の新視点」



片岡宏二・福岡県小郡市埋蔵文化財調査センター所長
＝福岡市で、上村里花撮影

片岡さんは「卑弥呼の時代に纏向的な強大な中央集権的政権が生まれていたのであれば、こうした乱は起きなかったはず。卑弥呼の死後、再び女王が共立されたことこそが、突出した権力が生まれていなかった当時の北部九州の状況に当てはまる」と指摘する。

国際日本文化研究センターの倉本一宏教授（日本古代史）も2018年に刊行した「日本史の論点」（中公新書）で、<そもそも邪馬台国が当時の日本列島における最有力の権力、ましてや唯一の権力であるという前提を疑ってみる必要がある>と、同様の指摘をしている。倉本教授はさらに、倭人伝が描く「宮室・楼観・城柵（じょうさく）厳かに設け」られた邪馬台国の様子は<運河で全国各地や朝鮮・中国に対しても開かれていた纏向遺跡とはまったく性

格が異なる>とする。その上で、当時は日本列島の各地に多様な政治勢力が存在し、近畿地方の纏向を王宮とした日本列島の中心的な権力である倭王権と、北部九州の邪馬台国を盟主とする地方政権の倭国連合が併存していた、とみる。しばしば議論となる倭人伝の距離記載についても、魏の帯方（たいほう）郡（現在の韓国・ソウル付近とみられる）から邪馬台国までの距離と考えれば、北部九州の筑紫平野に収まるとし、福岡県の久留米市や八女市、みやま市近辺を候補地として挙げている。

奈良県立橿原考古学研究所の坂（ばん）靖・企画学芸部長（考古学）も、2月刊行の「ヤマト王権の古代学」（新泉社）の中で邪馬台国の所在地論争に触れ、九州説を支持している。坂さんは、邪馬台国時代の奈良盆地には、魏と交渉し、西日本一帯に影響力を及ぼしたような存在はなく、同時代の纏向遺跡には<魏との交渉にかかわる遺物がない>としている。近畿説では、纏向遺跡内の最古の巨大前方後円墳、箸墓（はしはか）古墳を「卑弥呼の墓」とする見方もあるが、坂さんは、倭人伝の記述による限り<前方後円墳であるとはとても考えられないし、規模もそれほどのもものではなかったと考えられる>と指摘する。

片岡さんは「邪馬台国の所在地論争は、近畿と九州のどちらが進んだ社会だったかではなく、あくまでも『魏志倭人伝』が描いた邪馬台国はどこなのかという問題であり、両者の議論を混同してはいけない」

と強調する。今後も論争の行方から目が離せない。

高島忠平・佐賀女子短大名誉教授の話



高島忠平・佐賀女子短大名誉教授=佐賀市で2019年12月6日午後5時39分、上村里花撮影

現在の日本の考古学界には、近畿説が大前提としてあり、それに沿った遺物・遺跡の解釈がされている状況だ。本来、邪馬台国の問題は、どのように古代の国家が成立していったのかを探る古代史の問題であり、「魏志倭人伝」はじめ史書など文字史料をしっかりと読み解き、考古学資料と対応して論じていくべきだ。しかし、現在の考古学界にはそれが決定的に欠ける。それが問題であり、課題だ。

九州には、弥生時代中期から後期、石斧(せきふ)や石器、青銅器などの交易圏が形成される。その中心が北部九州であり、そうした交易圏を基盤に女王国連合が成立したと考える。女王・卑弥呼は、魏の王朝が遼東半島の公孫氏を滅ぼした直後に使者を送っている。それは国際的な情報を持っていないと

難しい。そう考えると、中国や朝鮮半島と交流が盛んだった北部九州出身と考えるのが合理的だ。

毎日新聞のニュースサイトに掲載の記事・写真・図表など無断転載を禁止します。著作権は毎日新聞社またはその情報提供者に属します。

画像データは(株)フォーカスシステムズの電子透かし「acuagraphy」により著作権情報を確認できるようになっています。

Copyright THE MAINICHI NEWSPAPERS. All rights reserved.